

BRAIN

DESIGN
COPY
CM
WEB



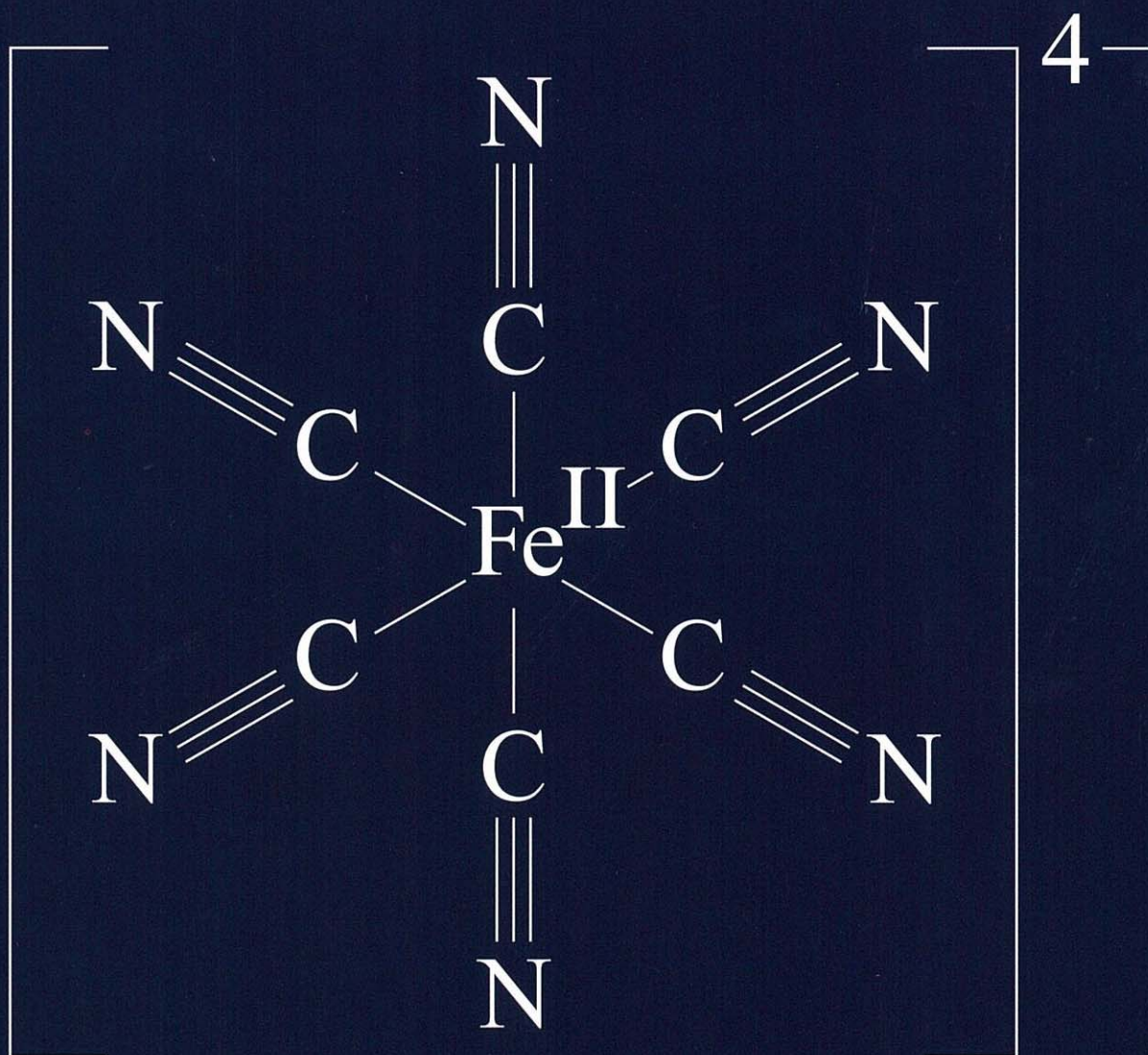
特集・公開!
トップクリエイターの
プレゼン企画書

青山デザイン会議・
世代を超えて
愛される
コンテンツの秘密

ブレイン

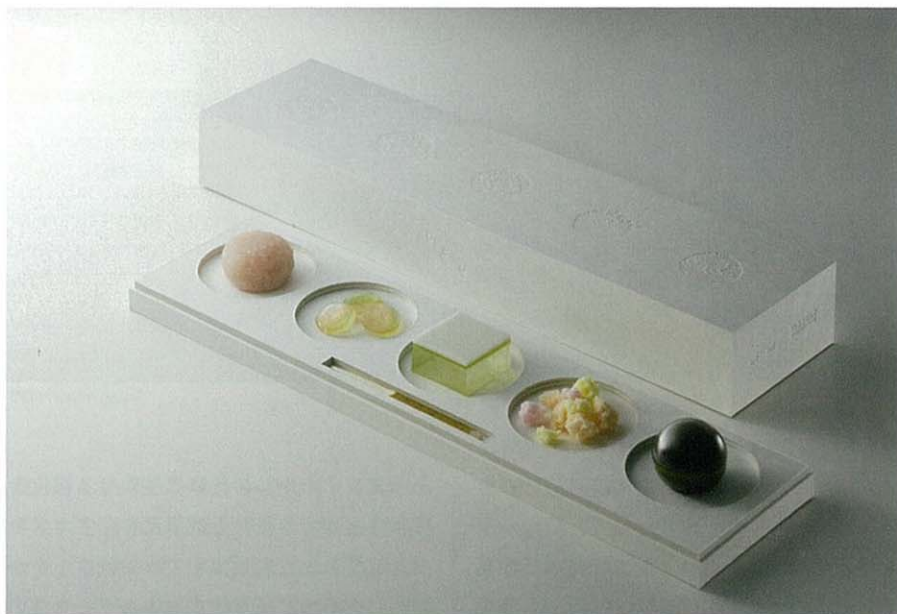
8

AUGUST 2013 VOL.637

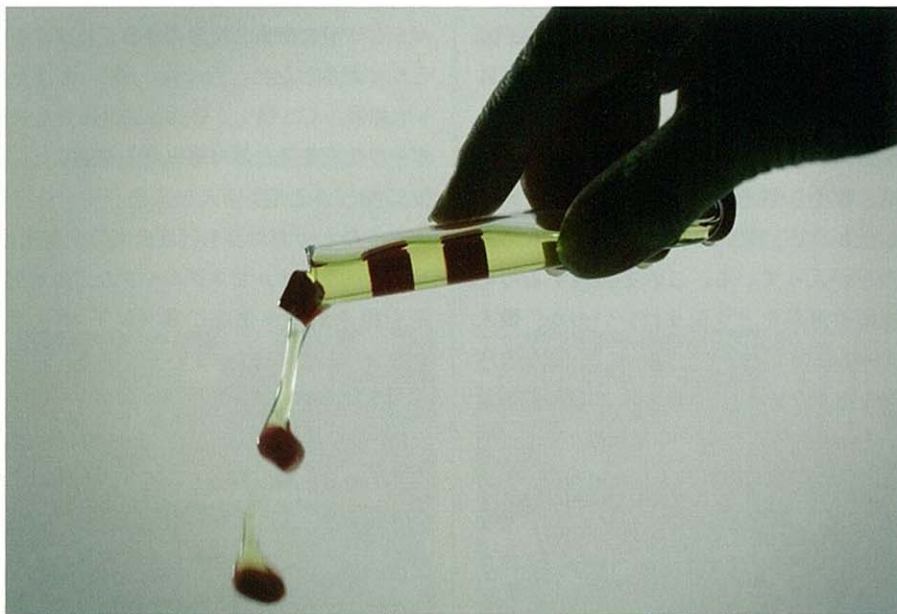




01



02



03



DESIGN PROJECT

デザイン プロジェクトの 現在

文・川島蓉子

✧

新しい挑戦を
重ねた取り組み



ifs未来研究所
おみやげプロジェクト

「未来のお菓子」と「未来の入浴剤」——ifs未来研究所のお披露目会で、2つのおみやげプロジェクトが発表された。所長を務める私が連載で書くのは手前味噌と思ったのだが、作り上げる過程にヒントがあると考え、まとめた。

「私のいる未来」のライフスタイル発信を

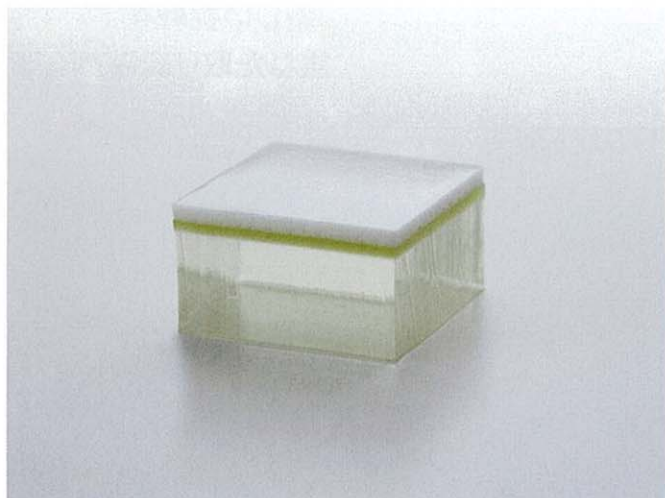
「今日は未来だと思います」をスローガンに掲げる ifs 未来研究所（以下 未来研）は、伊藤忠商事の協力を得て、伊藤忠ファッションシステムが始めた組織。使い手にとってのリアリティを大切にすること、いわば「私のいない未来」ではなく「私のいる未来」に向けた発信をしていきたいと作った。さまざまな領域の企業と面白いプロジェクトを手がけていこうと考えている。5月29日に東京ステーションホテルで行ったお披露目会では、発足にあたっての主旨に触れるとともに、建築家、プロダクトデザイナー、ジャーナリスト、ファッションデザイナーなど、さまざまな分野からなる7名のメンバーを紹介した。と共に、未来研の仕事のやり方を見ていただこうと、お



04



05



06



07

みやげプロジェクトを企画・実施して、プロセスも含めた紹介をし、参加者におみやげとして渡した。

とらやと組んで作ったお菓子「ひとひ」

未来のお菓子は、480年の歴史を持つ「とらや」と未来研のメンバーであるタクラムデザインエンジニアリングの渡邊康太郎くんが組んで作り上げた。

「私のいる未来」を前提とした「未来のお菓子」の考え方は、「茶席などの特別な場面で食べる嗜好品としての和菓子」ではなく、「日々の生活の中で気軽につまめる、必需品に近づける和菓子」だった。「四季の移ろい」とかかわりが深いのが和菓子だが、今回のおみやげは、「一日の光の移ろい」を前提にした。コンセプトは「一日のながれの中で、ふさわしい食べ物を、ふさわしい時に。からだにもおいしい、未来の和菓子」。「一日のはじまりは、朝日の淡

い光をイメージした「あかつき」という風に、5種類を一セットとして、朝から夜まで、それぞれのタイミングで食べる和菓子「ひとひ」を作った。せいぜい2、3種類を想定していたので、「え、多過ぎるんじゃないの?」と思ったのだが、「とらや」の職人チームは動ずることなく、すべてに力を尽くしてくれた。

例えば、夕食後のデザート「いざなひ」は、新月の周囲から漏れ出る光をイメージしたもので、球形の羊羹で中央部分に碧色の帯が入っている。これを実現するのに、技術や道具をどう使えばいいのか、職人チームは惜しみなく知恵を出す。微妙な色味を出すために何種類も作っては検討を重ねる。かたちだけでなく味や香りにもこだわり抜く。あらゆる角度から意図をかたちにすべく、最大限の力を注いだ。お得意様担当課アウトクチュール担当の中村哲雄さんは、「新しい技術への挑戦がいくつも

あって、これからの仕事に生かせる視点を養うことができた」と成果についてコメントしてくれた。短期集中でコンセプトをかたちにするのに圧倒的なエネルギーを注いだ「ひとひ」は、渡邊くんが創った美しいパッケージに収まり、力のあるプロダクトとして結実した。

ポーラ化成工業と取り組んだ入浴剤「バスオイルと泡」

もうひとつのおみやげ「未来の入浴剤」は、ポーラ・オルビスグループの開発・生産を担うポーラ化成工業（以下 ポーラチーム）と未来研のメンバーであるプロダクトデザイナーの酒井俊彦さんが作り上げた。「一般に未来の商品を考える仕事は、現在の商品との隔絶をどう盛り込むかの比重が高いが、今回は『今日とつながる未来』の商品なので、「継続感のある見たことがないもの」というところから発想した」と

01 とらや×ifs未来研究所で開発した和菓子「ひとひ」。新月の周りからわずかに漏れるほのかな光の風景をイメージした羊羹「いざなひ」。

02 朝から夜まで、それぞれのタイミングで食べる5種類の和菓子がセットになっている。

03 ポーラ化成工業×ifs未来研究所で開発した未来の入浴剤「バスオイルと泡」。オイルと泡が同時に体験できる。

04 餅米の生地から、紅く染めた白餡がの色が透ける「あかつき」。雲の奥から覗く朝日の淡い光をイメージしている。

05 白ザラメと水飴でできた「いきつぎ」。朝と昼をつなぐ優しい光を表現。

06 上は白いあわゆき、下は透明の琥珀羹でできた「ひるつかた」。お昼過ぎの糖分補給に。

07 移り変わる夕焼けの色をイメージした生姜味のカルメラ「ゆうつかた」。

08 「バスオイルと泡」は、入浴剤のパッケージに試験管を使うのも新しい試みだった。

09 「いざなひ」開発過程。微妙な色味を出すために、何種類も作っては検討を重ねた。

10 「ひとひ」開発チーム。左奥がタクラムデザインエンジニアリングの濃邊康太郎さん。

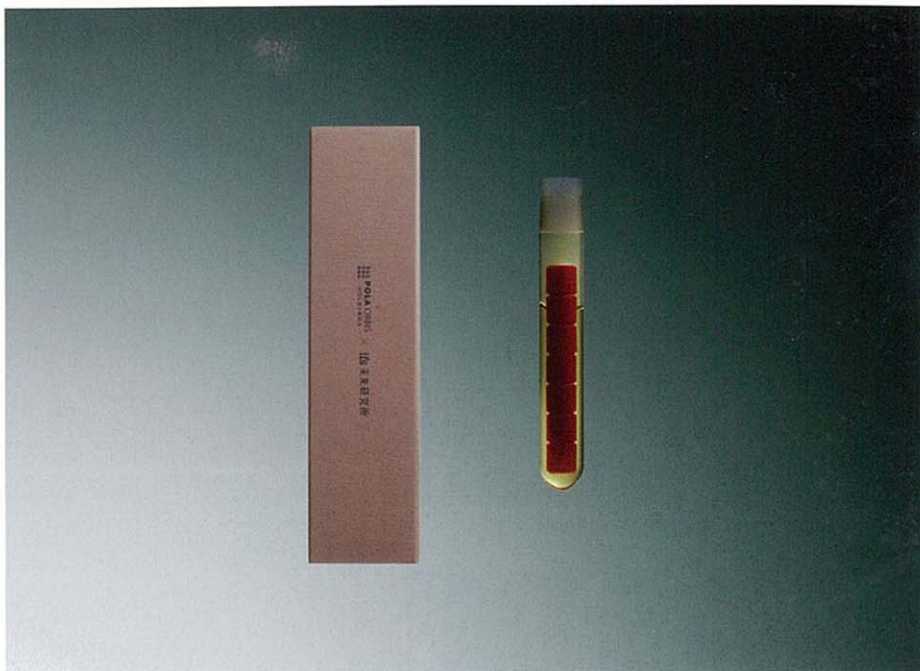
11 「バスオイルと泡」では、バスボムの発泡を持続させるために、配合レシピと圧力を徹底して調整した。

Photo:Yosuke Suzuki

酒井さん。華やかで少しゴージャスなバスタイムを彩る入浴剤を提案した。当初のコンセプトは、バスタブに入れると跳ねるようにいどこかジャンプをして浮かび、発泡しながら沈んでいく「ロゼシャンパンのような色味と匂い」を漂わせる入浴剤、というもの。「儚く淡い色、ブルガリアンローズを贅沢に使った香り、野バラの保湿オイル、細やかな炭酸ガスの泡。華やかさを楽しむ、少し未来の入浴剤」という考えで「バスオイルと泡」と名づけた。



09



08

オイルと泡が同時に体験できる入浴剤、浴槽に黄金色に浮かび上がるバスオイル、淡くほのかな泡が湧き上がり続けるバスボムなど、いずれもポーラ化成工業として初の試みだったという。研究所開発研究部S開発室室長の赤松尚さんは、どれひとつ否定せずに前向きな挑戦を始めた。年明けからかかったプロジェクトなので、5カ月弱という超短期間でかたちにしなければならない。

例えば、バスボムはある程度の大きさがないと、浴槽に浮かび上がるか、入れた瞬間に発泡してしまう。配合レシピと圧力の調整を徹底して行い、発泡を持続させるのに成功した。何度も実験を繰り返し、使った時のシーンを検証しながら開発を進めた。容器はガラスの試験管タイプを想定したが、ガラスは怪我につながるということで、ポーラチームではそれまで使っていなかっ

たもの。「割れても絶対に飛び散らないこと」を前提にしたコーティング技術を、従来にない短期間で開発して取り入れた。工業製品として、量産を前提としたハードルが幾多も存在するところを、未来に向かって改善する方向へ働きかける。赤松さんをはじめとするポーラチームと酒井さんが切り拓いた途でもある。

未来研のメンバーと企業チームがフラットなかかわりを持ち、全力をつくして前に進めようとする力が、魅力的なおみやげを生み出した。それは、職人技の手仕事でも工業製品でも同じ道程。日本のものづくりの底力が、未来に向かって大きな可能性を秘めていると確信した。

かわしま・ようこ

1961年新潟市生まれ。早稲田大学商学部卒業、文化服装学院修了。共立女子大学、多摩美術大学非常勤講師。Gマーク審査委員。著書に「伊勢丹な人々」(日本経済新聞社)、「ブランドはNIPPON」(文藝春秋)などがある。



10



11